

論文 / 著書情報
Article / Book Information

| | |
|-------------------|---|
| 題目(和文) | 認知指向コミュニケーションにおける社会的結合と非言語キューの関連 |
| Title(English) | |
| 著者(和文) | 横塚崇弘 |
| Author(English) | Takahiro Yokozuka |
| 出典(和文) | 学位:博士(理学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第12026号, 授与年月日:2021年6月30日, 学位の種別:課程博士, 審査員:三宅 美博,石井 秀明,青西 亨,瀧ノ上 正浩,長谷川 晶一 |
| Citation(English) | Degree:Doctor (Science), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第12026号, Conferred date:2021/6/30, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,, |
| 学位種別(和文) | 博士論文 |
| Category(English) | Doctoral Thesis |
| 種別(和文) | 審査の要旨 |
| Type(English) | Exam Summary |

論文審査の要旨及び審査員

(2000字程度)

| 報告番号 | 乙 第 号 | 学位申請者 | 横塚 崇弘 | |
|-------|----------|-------|--------|-----|
| | 氏 名 | 職 名 | 氏 名 | 職 名 |
| 論文審査員 | 主査 三宅 美博 | 教授 | 長谷川 晶一 | 准教授 |
| | 石井 秀明 | 教授 | | |
| | 瀧ノ上 正浩 | 准教授 | | |
| | 青西 亨 | 准教授 | | |

本研究は、ビジネスや教育等の外的な目的がある認知指向の対面コミュニケーションにおいて、参加者同士の相互信頼感等を表す社会的結合と非言語キューの関連を実験的に検証したものである。「認知指向コミュニケーションにおける社会的結合と非言語キューの関連」と題して5章より構成されている。

第1章「序論」では、研究の背景・目的・方針を示している。まず研究の背景について、感情指向コミュニケーションの先行研究とフィールド調査の事例を参照しながら、社会的結合を計測するニーズが様々な社会的場面で高まっているが、認知指向コミュニケーションでは社会的結合と非言語キューの関連が学術的に十分に解明されていないことを説明している。これを踏まえて研究目的として、感情指向コミュニケーションでこれまで観察されてきた社会的結合と非言語キューの関連を手掛かりに、認知指向コミュニケーションにおいても観察されるか検証することを掲げている。方針として、教育での授業とビジネスの会議に注目し、それぞれをモデル化した単方向型と双方向型のコミュニケーション課題で検証することを述べている。

第2章「実験(1)：単方向型レクチャー課題における頭部運動と共感の関係」では、一つ目の実験的検証について説明している。実験方法として、一対一で話し手から聞き手に対し、一方的に発話するレクチャー課題を設定し、聞き手が話し手に対して感じる共感の程度と、話し手と聞き手の頭部運動の同期との関連を分析している。結果として、聞き手が共感状態であるとき、頭部運動の同期が生じやすいことを明らかにしている。さらに共感状態では、話し手が聞き手よりも早いタイミングの頭部運動が特に有意に生じやすくなることも観察している。頭部運動は、発話の強調やリズム、発話意図の提示等の会話中の調整子であることを踏まえ、認知指向コミュニケーションにおける話し手先行の同期は、聞き手が相手に対してより深く共感していることを示す役割を担うと考察している。

第3章「実験(2)：双方向型グループ問題解決課題における発話特徴とラポールの関係」では、二つ目の検証について説明している。実験方法として、三人一組で参加者同士が時間内に自由に発言ができる創造的グループ問題解決課題を設定し、ラポールと発話インタラクション及び音声ピッチの同期との関連を分析している。結果として、ラポールと有意に正相関するのは発話インタラクションのみであり、音声ピッチの同期はラポールと有意に相関しないことを明らかにしている。また、発話インタラクションはラポールの構成要素である相互の注意、肯定的な感情、動きの協調性のすべてで有意に正の相関を持つこと、並びに単純な発話総数はラポールと関連しないことも確認している。発話インタラクションが多いことは、自身や他のメンバーの発話が無視されずに拾い上げられることを意味する。従って単純な発話量ではなく発話そのものを拾い上げることが、ラポールとその構成要素に対しポジティブな知覚を与える役割を担うと考察している。一方で音声ピッチの同期は、ピッチの変調によって社会的望ましさや好ましい印象を与える等の感情的な対人印象の操作を担うことが知られている。従って本実験は同性かつ同じ立場の参加者による問題解決課題であり、良い対人印象へ操作する必要性が小さいことから、ラポールと音声ピッチの同期との関連が観察されなかったと考察している。

第4章「総合考察」では、実験(1)および(2)のまとめと考察を行っている。二つの実験を通じ、感情指向コミュニケーションで観察されていた社会的結合と非言語キューの関連は、認知指向コミュニケーションでは同様ではないことを示している。このことは、認知指向コミュニケーションを特徴づける外的な目的達成に対し、それぞれの非言語キューが持つ役割の貢献の程度に起因して、社会的結合との関連に違いが生じた可能性があることを考察している。認知指向コミュニケーションでは、発話内容の理解・納得や、賛成・反対の意思表示、新たな意見の促しや合意の形成といった認知的プロセスが生じる。従って、他者の発言への興味・関心、他者の意見への理解・納得、意見交換の歓迎等を示す、認知的なプロセスに貢献する非言語キューは、参加者間に形成される社会的結合と関連する可能性があることを議論している。本考察を踏まえ、認知的なプロセスに貢献する非言語キューの役割を体系化していくことで、今後の応用に向けた研究の見通しを立てられる可能性を示している。

第5章「結言」では、実験結果とその考察を総括し本論文で得られた成果をまとめている。

以上を要するに本論文は、認知的な対面コミュニケーションにおいても社会的結合と非言語キューが関連することを実験的に検証したものであり、理学的に貢献するところが大きい。よって、本論文は、博士(理学)の学位論文として十分価値があるものと認められる。(2,008字)